

分岐から相互流動まで
東アジア都市農村移行のロジックと実践経路の転換
柳 建坤 (LIU Jiankun) *

第二次大戦後、欧米の植民地体制は崩壊し、長きにわたって欧米国家の植民地統治を受けていた多くの東アジア発展途上国は民族解放と主権独立を獲得し、経済、政治、そして文化などの方面で「近代化 Modernization」を実現しその発展が課題となった。大都市の集中的発展によって実施された都市化戦略は、いくつもの発展途上国の政策決定者と研究者によって優先的な発展方法とされ、都市の規模と量および経済発展を促すと同時に、都市農村間の矛盾を日に日に顕著にさせ、社会の持続的発展に影響を及ぼすようになった。筆者は研究を進めるにあたってこれを三つの部分に分けている。

第一に、「近代化理論」を核とする欧米の移行理論モデルが含む「都市農村二分」仮説が東アジア国家の政策決定者の都市農村関係に対する認識に深刻な影響を与えた。また、その理論の指導の下、都市農村の個別の発展ルートが採用されたが、これが近代化の初期において人口の都市への移動と都市規模拡大に傾注させた理論的原因であり、新たな移行の時代背景の下では、その代表性と有効性が疑われている。時空の圧縮がマクロ環境を移行させる急激な変化をもたらしたため、空間的経済連関ネットワークの中で人や商品、資本、情報の流れが存分に湧き起こり、都市と農村は重要な資源交換の結節点として経済空間の流動の中で協同的移行を完成させていた。

第二に、筆者は前述の都市農村の「空間流動」分析枠組みは日本と韓国を都市農村移行の歴史実践の方面における比較的成功例と考察し、これにより大都市圏内部の都市部と非都市部の間における協力関係が大都市圏構造関係をより優れたものにする重要な作用であると説明する。日本と韓国は早期の大都市過度な発展からもたらす重大な問題の後に産業を都市回廊地帯(周縁地帯)に配置させた。衛星都市と地方都市圏を発展させることを主要な方法として、高速道路ネットワークを通じて各地域を結び、都市圏全体のために産業の協力と協同発展を進め空間的相互作用のための物理的基礎を提供し、独特の「廊道型」都市圏の都市化モデルを構築した。

第三に、筆者は中国を特殊な事例として研究を進めている。中国は人口増加、産業の発展および都市農村関係などにおいて極めて特殊であり、東アジア発展途上国の都市化が持っていない複雑性を有しており、中国以外の国の都市農村移行に対して参照価値がある。中国の都市化進展には、明らかな地域差がある。東部では日韓の発展の構想と方法に比較的類似しており、都市農村関係は極めて緊密な都市圏を形成した。中部と西部では自然地理的な条件と社会的条件において東部との間に比較的大きな差が存在しており、それゆえに社会発展の遅滞が生じ、その上、都市化進展と質に影響が生じている。

最後に、筆者は「生態系」概念から東アジア都市農村間に共生関係あるいは対立関係を形成する作用過程を理解することを提起する。この作用過程により派生する都市農村統制発展の鍵となる地域である都市周縁地帯、さらにはこれをめぐって「空間管理」を核とする都市農村移行の実践経路を構築する。都市農村移行は実際には自然界の生態系の発展と似通ったメカニズムを持ち、主体と環境の間のある均衡関係が「生態系」の長期持続と健全な発展を維持する鍵となる。これは政策決定者が都市農村間における社会経済活動

交流の持続性と相互利益を保持すべきであることを意味している。そして、両者の間に位置する「都市周縁地域」は都市農村の相互関係と経済交流とを結びつける機能を受け持ち、都市と農村の相互関係がきわめて緊密であるだけでなく、そのうえ矛盾と衝突の敏感な地帯でもあり、その進行を有効的に管理できるのは都市と農村の矛盾を解決する現実的な着眼点である。政府が主導する「空間管理」は筆者が提起する実践経路である。ある面では国家のトップレベルの計画と地方レベルの執行とが結合し、また一方では土地の複合利用を促進することを通じて都市と農村の機能の補完と経済交流を促進し、それによって大都市圏の生態系の均衡状態を維持する。

（翻訳 中山大将、巫靚）